

〈事例報告1〉「清少納言と紫式部を比較しながら読み深めよう」（古典B）

1 実践に至る背景

本実践の目標は、生徒が古典を読み、人間、社会などに対する思想や感情を的確に捉えること、そしてものの見方、感じ方、考え方を豊かにすることである。古典に表れた人間の生き方や考え方などを自分に引き付けて捉えさせるために、文章中の表現を根拠にして話し合ったり作文を書いたりする言語活動を、単元を中心に据えたい。

従来、古文の授業を「一方的に文法事項を説明されるもの」と捉えてしまい、学習に意欲がもてない生徒もいたのではないかと考えられる。また、生徒は、授業で扱われた本文のみの理解に終始し、せっかく得た知識を他の文章の読解に役立てようとする姿勢が弱いのではないかと感じてきた。さらに、どれだけ古文を読めるようになっても、「なぜ古文を勉強しなくてはいけないのか」という彼らの疑問は一向に解消されないようである。

そこで今回は、科目や単元を横断する取組をし、古文に限らない文章読解の基礎的な方法を示すことによって、広い視野や深い考察力の育成を図る機会としたい。本実践は、古文に描かれる人間模様を読み取らせ、現代の自分の生き方に照射させることを主眼とする。その結果、教材を身近なものとして読む学習者が増えるものと期待している。

2 指導目標と評価

(1) 身に付けさせたい力（論理的思考に関わる目標）

二つの作品を読み、比較の観点を自ら設定した上で比較し、意見として記述する力。

本実践では、二つの作品からそれぞれ生きた人間の姿を読み取らせ、その姿を比較し意見を表現させる。読解には、語句や一文ごとの連なりから要旨を把握し本文を読み解いていくアプローチと、本文と実社会をつなげ展開を予測し全体の主旨を見通していくアプローチとがあると思われるが、今回は後者に主眼を置いた学習活動とする。

(2) 関係する学習指導要領の指導事項

古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確に捉え、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。〈古典B(1)ウ〉

(3) 関係する論理的な思考の活動

趣旨や主張を把握し、評価する。(③把握・評価)

(4) 評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
登場人物の人物像や置かれている状況を把握し、また時代背景や思想を的確に捉えて、それぞれの心情を読み味わおうとしている。	登場人物の人物像や置かれている状況を把握し、また時代背景や思想を的確に捉えて、それぞれの心情を読み味わっている。	基本的な文法事項である助動詞や敬語に注意し、正しく内容を理解している。

(5) 評価方法と評価基準表

ア 評価方法

作文「清少納言と紫式部、どちらに共感しますか」

イ 「読む能力」の評価基準表（ルーブリック）

観点：登場人物の人物像や心情を理解している。（読む能力）

評価A	評価B	評価C
双方の本文に即した根拠を基に、それぞれの登場人物の在り方について比較の軸を設定し読み深めた上で、その軸に沿って自分の意見を述べることができる。	双方の本文に即した根拠を基に、それぞれの登場人物の在り方について比較の軸を設定し、その軸に沿って自分の意見を述べることができる。	片方、または双方の本文に言及していない。あるいは、比較の軸を設定することができていない。

3 単元の指導計画

(1) 言語活動と教材

ア 言語活動

古典に表れた人間の生き方や考え方などについて、文章中の表現を根拠にして考察したり意見を表現したりすることによって、読みを深める。

イ 教材

「紫式部日記—日本紀の御局」「枕草子—雪のいと高う降りたるを」（『古典B』第一学習社）

(2) 単元観・教材観

ア 単元観

横断的な取組が主眼であるので、古典であるというハードルをできる限り取り除き、文学の読み比べに焦点化させたい。特に当時の女性の置かれた立場や男性との関係性などに思いを馳せさせたい。平安時代の女性のありようを一般化して捉えさせると同時に、当然のことながら個々人は違った個性をもっていることに気付かせることになるだろう。中でも、知性というものに対する態度の違いがテーマになっているので、進学などについて考える高校生には、投げかけるものが多いと期待する。

イ 教材観

自照文学として、筆者紫式部の周囲に向けた視点や内面描写を味わうことができる。紫式部の人柄を想像させたい。また、今後読む「源氏物語」の裏話としてのおもしろさも興味を引くだろう。

文法事項では敬語に不安を感じている者が多い。本文は敬語が多いと同時に省略も多いというものであるが、文法や文脈、時代背景など、総合的な判断の基に適切な現代語訳ができるよう、確認させたい。

(3) 指導と評価の計画（配当時間 8 時間）

「枕草子」の読解は別の単元で既に行っており、今回の読解は「紫式部日記」のみを扱う。

次／時間	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点	◇評価規準◆評価方法 ※努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第1次 (5時間)	①本文を読解する。	①助動詞、敬語などの文法事項に注意させる。省略されている言葉や背景を補いながら、読解させる。	◇読む能力 知識・理解 ◆行動の観察、記述の確認 ※できる限り多くの生徒を指名し、発言させる。その上で机間指導による個別指導をする。
第2次 (3時間)	①マトリックス表を用いて話し合いながら、自らの意見を整理する。 ②作文を書く。 ③作文を回覧し、コメントする。また、戻ったコメントを見て自己評価をする。	①自らの論の組み立てが妥当であるかなどを確認させる。 ②作文用紙に付したチェック項目や、前回の作文（注）における傾向を説明し、評価基準を明示する。 ③相互評価、自己評価においては、肯定的な意見を心がけると同時に的確な指摘も行えるよう促す。	◇関心・意欲・態度 読む能力 ◆記述の確認 ※机間指導により、考えをまとめる手助けをする。

注 前回の作文:本実践の直前に、別の単元において同様の読み比べの活動を行っていることを指す。

4 学習活動の実際

(1) 学習に取り組む生徒の姿

それぞれの本文を学習する前にその人物関係を概説したが、それだけで学習者の興味を喚起できた感触があった。「枕草子」では「清少納言と定子様の関係がうらやましい」「執筆当時の時代背景を知ることができておもしろかった」などの感想が書かれた。「紫式部日記」については、紫式部の自意識の屈折具合を知った生徒たちが、どのように意見を言えばいいのか分からないという表情を見せたため、作文の前に、各自の考え方についてマトリックス表を用いて話し合わせた。題は「紫式部と清少納言、どちらに共感しますか」であるが、「どちらか」に限定されない立場が当然あるという態度を授業者が示せたことで、学習者にもリラックスして意見を表明できる環境を与えられたと考える。

なお、「共感」についての比較点を以下のように例示した。

- ・ 学識に対する態度

- ・ 自分が褒められることについての態度
 - ・ 「才がる」と言われることへの態度
- ア 話し合い

図書館の6人掛テーブルに模造紙と付箋を配布し、班ごとにマトリックス表の上で意見を述べる場を設けた。ところが、どの班も、付箋を貼ってそれぞれの立場を確認した後の会話が成立しない。しばらく時間を与えても、付箋を動かすような行動はほぼ見られなかった。

イ 作文

一方、活発だったのは作文を書く活動である。

授業者が意図して行ったのは以下の点である。前回の作文を添削したものを今回書く場で返却し、個々のミスについて見直させた。また、全体的な傾向（段落構成ができていない、慣用表現を用いるなどの工夫した表現が少ない、誤字が多いなど）について説明した。その上で自己チェック項目を確認させて、注意を喚起した。その結果、特に接続詞や段落構成についてよく考えられた作品が多くなった。また回覧するときも、作品の構成や主張の伝わりやすさについて読み取ろうとする様子が見られた。「ここを工夫したことに気付いてもらってうれしい」などの感想があったことが、クラスの成長をうかがわせる。

また、登場人物に対する共感的な態度や、それを身近なものに置き換えて寄り添おうとする態度についても、大変積極的な記述が見られた。軍記物語を題材にした前回の取組では感じられなかった、学問や人間関係に関する切実な意見が表され、多くの者がこれを「古典」と意識せずに読み込んだのではないかと思う。

(2) 生徒の感想

主な感想は以下のとおりである（○は複数意見）。

- 前回より考え方がいろいろあっておもしろかった。みんなの価値観の違いを知ることができてよかった。
- 人の作文を読むと世界が広がる感じがしておもしろかった。
- 自分では共感できないと思っていた箇所も、長所として捉える作文を読んで、新しい発見ができた。
 - ・ 人によって比較の軸と捉え方が違っていて、それによって内容も全く違うので、読んでいておもしろかった。
 - ・ 清少納言も紫式部も長所と短所があり、人間は完璧にできないということが改めて分かった。
 - ・ 「人それぞれ」でまとめてはきりがなくて、きりがいいものを書くのだから自分の意見をまとめないと書けないなと思った。
 - ・ 知識そのものの本質的な価値について考えてある作文がすごかった。
 - ・ 自分の内面を分析しているところがすごい。
- 比較がはっきりしている文章は読みやすかった。
- 接続詞が上手な作文は読みやすかった。
 - ・ 本文中の言葉を引用すると分かりやすくなると思った。
 - ・ たとえを出して書いている人が多かったので、まねしたい。
- 現代に当てはめて書いてある文章は、興味を引いて読みやすかった。
 - ・ 作文を書いた時点では言いたいことがまとまっていなかったが、他の人に意見していく中で自分の意見が分かった。

(3) 「身に付けさせたい力」の実現状況

次の表は、2クラス78人中の作文についての評価の内訳である。

評価A	評価B	評価C
29.5%	69.2%	1.3%

上記(2)は作文を回覧した後の感想であるため、作文に関する内容が多いが、これによると、今回生徒が得た気付きとして以下のような点が挙げられると考える。

- ・ 論旨が明快な作文を書くためには、より深い読解が基になる。
- ・ 例を挙げ、または自分に引き付けながら読むと理解が深まる。
- ・ 他者の意見に接することも、本文の理解につながる。

もちろん第1次では文法事項などに四苦八苦しなから読解していたが、第2次の活動において何度も本文を読み直していると、目標としていた「本文と実社会をつなげ全体の主旨を見通していく」読み方を多くの者が自然とするようになっていた。

その反面、話し合いの失敗が課題として残る。自分の意見を口頭で述べることはもとより、他者の意見やその根拠を引き出すという活動に全く慣れていないことが分かった。また、作文についても、自分の内面の機微を表す言葉はまだ不足しており、どの作文を読んでも同じことが書いてあるように見える。豊かな表現を磨いていく機会を今後も設け続けたい。

5 おわりに

この後の活動として「大鏡—花山天皇の出家」を読んだが、一条天皇の御代の直前の、藤原氏の策略に生徒は大変困惑していた。これまで藤原氏側の女性の運命について共感的に読んできたのに、裏切られたとでも言わなければならない。しかし、登場人物の間に比較の軸を設定しながら読もうとするこのような姿勢こそ、年間を通じて身に付けさせたかった力であり、態度である。文法はあくまでも読解の手助けになる事項であると気付き、生徒自身が俯瞰的に人間模様を読み取ろうと進んで本文に向き合っている。また、本文に表れる表現上の技法を「うまいこと言うから、自分もこれからこう言おう」と評する者もいた。

文法事項の定着にはまだ及ばないし、本文のどこに着目するかなどの演習的な読解にも課題は残るが、今後につながる実践になったと思われる。

〈参考〉 生徒の作文例

評価A—「弱さ」について比較している

タイトル「弱さとかわいさについて」

私は、紫式部をかわいいと思いましたが、清少納言についてはそうは思いませんでした。それはどうしてか、二人の違いを少し考えてみました。

まず、「日本紀の御局」で、紫式部は自分が悪口を言われたということや、「一といふ文字をだに……」とあるように、自分の不自由さを読者に明かしています。私はここで、何か弱いものに触れた気がして、友達と秘密を共有したときのような気持ちになりました。

一方、清少納言は「雪のいと高う降りたるを」で、自分の能力の高さを読者に示しています。

ここからは清少納言の自信が大いに感じられ、紫式部のような弱さは少しもありませんでした。

こうして比較すると、紫式部をかわいいと感じるのは、彼女には清少納言にはない「弱さ」があるからではないかと考えました。弱いから守りたいという気持ちが働くし、同時に「かわいい」という感情が生まれるのではないかと思います。例えば、小動物や幼い子どもを見てかわいいと思うのはそのせいだと、私は考えます。

一方の清少納言は、完全無欠さを持っていると思います。自分が支えてあげなくても、彼女は自立している、そう思うから、私は清少納言をかわいいとは思わなかったのだと思いました。

評価A—「自慢すること」について比較している

タイトル「五十歩百歩」

僕は清少納言と紫式部、どちらにも共感できません。

まず清少納言についてですが、彼女の周りの環境によってそう振る舞わなければならなかったのは分かりますが、果たして文章に書くまでして自分を自慢しなければならなかったのでしょうか。もし、彼女が自分の評判を通して中宮定子の地位を上げたいと思っているなら、定子が清少納言を自慢できるよう振る舞えば十分なはずです。しかしそれを文章にするとすると、それこそ「日本紀の御局」のような評価をされ、定子もろとも閑職に回される恐れがあるので、あまり定子のために動いているような印象がありません。「枕草子」を読むと、清少納言の自画自賛を延々と聞かされているようで、うんざりしてきます。

次に紫式部ですが、彼女は内面では知識をひけらかしたくないと思っているのですが、「日本紀の御局」を読んでいると「枕草子」と同じように知識の自慢が見え隠れしていて、結局自分の自慢がしたいだけじゃないかと思ってしまいます。彼女の知識に対する価値観と彼女の書く文章の間に、矛盾を感じてしまうからです。

このように、二人は思っていることは真逆であっても、二人の書く文章を読むと、教養がにじみ出ているというよりも、教養の高さを自慢しているという印象を受けます。結局、多くの方は知識をもつと、その人がどう思っているのかに関わらず、知識を自慢したくなってしまうんだなと思いました。

評価B—理由の列挙にとどまっている

タイトル「紫式部」

私は紫式部に共感します。理由が二つあります。

一つ目は、清少納言のように自分の学識をひけらかしていないからです。『能ある鷹は爪を隠す』というように、本当に優れた人物はその才能をひけらかしたりせず生きていくと思うからです。紫式部は自分の身内にさえ学識を見せびらかしていませんでした。

二つ目は、紫式部の生き方に私と同じようなものを感じるからです。なぜなら紫式部が不器用なように私も何かを伝えようとするのがとても苦手だからです。また、自分のことを低くみているところが共感できます。

以上の二つの理由から紫式部に共感します。清少納言にも少し共感するものがあります。知識があっても行動にうつさなければ意味がないと思うからです。でも紫式部の方が共感しました。

評価C—「清少納言」のみに言及している

タイトル「清少納言」

清少納言に共感しました。なぜかと言うと、体育などで自分のやっていた球技などをやったときに、自分ができるところを出したり、自分の記録がよかったりすると、自慢したりするところがあったりするので、清少納言の知識をひけらかすところに通じるものがあると思いました。

日本人は謙虚がいいみたいなどころがあるけれど、できるなら清少納言のようにひけらかしていく方がいいと思う。だって、できるならそれを表現しないと損じゃんか。「あー、あのときできるところを見せればよかった」とかバカみたいだし。「やらなくて損するより、やって損する」この精神、清少納言のようになるべきだと思いました。

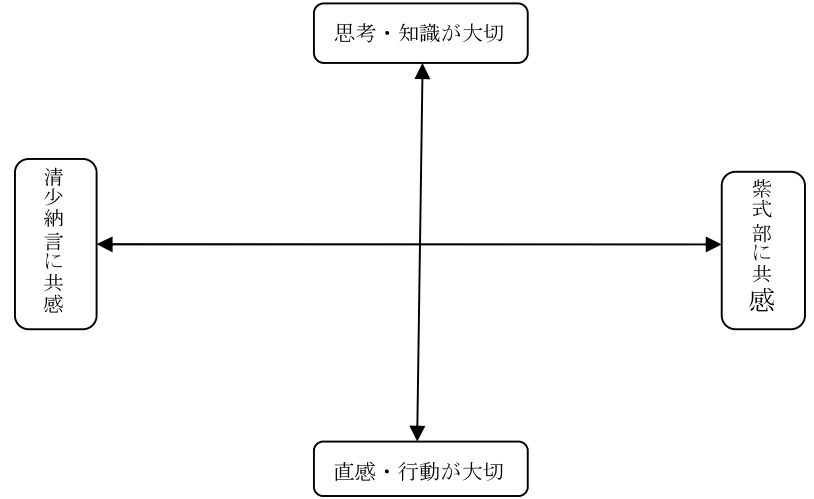
より

より

より

より

感想



人間にとって、またはあなたにとって、知識とはどのようなものですか。

組
番

	事前	事後
根拠を複数挙げた上で意見を述べている		
段落構成が明快である		
比較の軸が明快である		

】